

第20回常民文化研究講座

民具を語る 2

最上紅花の魅力

—なぜ手仕事なのか 天然染料なのか—

山岸 幸一氏

草木染織家(日本工芸会正会員)

参加自由・事前申し込み不要

2017年1月16日(月)

13:00～16:00

神奈川大学横浜キャンパス

9号館911室(日本常民文化研究所)

お問い合わせ先

神奈川大学日本常民文化研究所

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎045-481-5661 内線(4358)

主催 神奈川大学日本常民文化研究所

第20回常民文化研究講座「民具を語る」ではこの間、“布”を通した常民文化を取り上げていますが、今回は染色、織物をテーマに山形県米沢市に住む草木染作家の山岸幸一氏の語りです。

米沢織の織屋の次男として高校卒業後一旦は家業に従事した氏は、機械織の反物になじめず草木染織家、山崎青樹氏の下で修業、その後、水質など草木染にふさわしい地を求め、昭和50年に現在の米沢市大字赤崩に工房を開設しました。

「心豊かな貧乏人」「心もようを織る」が氏の信条で、染料となる植物から自家栽培、山蚕まで養い、染料や糸と会話しながら織機に向かっています。

「よく染まった糸は、その迫力に負け使えないことがある。そういう糸は何年か寝かしておくとし糸の方から今が使うチャンスだよ！と訴えてくる」と糸に対して気後れがなくなった時、氏はその糸を使い始めるといいます。床の間には、米沢地方に特徴的に分布する木霊の供養塔、「草木塔」の掛け軸が掛かっています。

山岸さんの代表的な染職は「紅花寒染」です。煮染をしない冷染技法で織り上げたものにつけた名で、染は湿度が少ない2月、それも真夜中に行われます。氏のごつい手にはあかぎれ一つありません、紅花も含め染料植物はみな薬草であるといえます。山岸さんの染織の話には私達が忘れかけている太陽、風、水など自然の恵みへの感謝が端々にうかがわれます。

当日は山岸さん自身の語りと作品にふれながら染織を通した手仕事の世界をお聞きしたいと思います。ご関心のあるみなさまの参加をお待ちしております。